

5月号は、p.1-3『入学式』、p.4-5『鎌倉歴史遠足』、p.6-7『台湾の雅典娜華徳福学校』、p.8-11『8年生劇』のトピックでお届けします。

入学式

1年生担任 林 容子



2025年4月12日、横浜シュタイナー学園第21期生の入学式。15名の新一年生と初めて出会う日。私がシュタイナー学校の教師として歩み始める日。

この日までに保護者の皆さんとは保護者会を2回もち、ご挨拶を済ませていた。しかし入学する子どもたち本人と、担任となる私が顔を合わせることは、関係する全員の方の配慮と尽力により慎重に回避されてきた。学園のそのような慣例を知ったときは、「そんなものなのかな。」と思った私だった。それで、入学願書の写真を見たり保護者の方の我が子紹介を読んだりしながら、こんな子だろうか、あんな子だろうかと思いをめぐらせ、イメージを膨らませて過ごした。その後、思い描いたイメージを核にし、一人ひとりに渡すマークを考えて時を過ごすうちに、私の中では小さな変化が起きていた。子どもたちの像が少しずつ色濃くなっていき、それぞれの子として立ち上がってくるような、かすかな予感を感じられるようになった。会わない時間、会えない時間は、私の中で一人ひとりの子のイメージを果実酒のように醸し、子どもたちとの出会いの準備をしてくれていた。

その頃、入学式を控えた私の心は、一部分が妙に落ち着いていて、不思議な静けさをたたえていたことを覚えている。(あくまで一部分で、そのほかの部分は散らかり放題！入学式の準備もギリギリまでかかって、周りの先生たちをやきもきさせていた！それにも関わらず。)世界がとても美しく見えて、まるでこの世ならぬ世界に来てしまったかのように静謐な時間がときどき訪れた。私はそれを、この後やってくる嵐のような忙しい日々へのはなむけとして、神様がくれたプレゼントのように感じていた。

そして入学式当日。新一年生と保護者のみなさんが部屋に

入った後、私は部屋の外で出番を待った。閉じられたドアの内側で、お日さまはお母さん・・・の歌声が流れる。今年の新一年生は上に兄姉がいる子が多く、学園の入学式を経験している保護者がたくさんいる。歌声が、流れるように美しい。やがて止み、私の名前が呼ばれた。ドアがさっと開けられる。私は部屋へ入り、私に向けられるたくさんの晴れやかな顔を見る。新一年生の小さな顔も所どころに見えている。触覚で感じてしまいそうな多くの視線の中、私は一年生の担任としての挨拶の言葉を述べていく。今、初めて出会う子どもたちと、これから長い年月をいっしょに歩いていくことになる保護者の皆さんに向けて。緊張感と浮遊感の中、あの静かに落ち着いた私が、耳元で「真実の自分でいるように」と語りかけてくる。それで私は自分が本当に思っていることを口にすることができた。保護者の皆さんと力を合わせ、子どもたちが真に自由な人間になるために、その成長を支えていきたい、と。いつもの私なら、臆病風に吹かれて人前では口にしないだろう願い。いつもはそんな大それたことは言えない、けれど今日は言わなければ、と用意してきた言葉だ。今日は私がどんな人間なのかを見てもらわなければならない日なのだから。

その後、一人ひとり子どもたちの名前を呼んだ。「はい！」と返事をして席から立ち上がり、私に向かって歩いてくる子どもたちの姿を追う。その子が私の前に来てくれて、目をしっかり合わせて挨拶の言葉を言ってくれる。その素晴らしい体験の後、ふと気が付くと、私の中にそれまで長らくたゆんでいた浮遊感が消えていた。私はここで今から、この子どもたちと一緒に船に乗る。私自身も、シュタイナー学校の教師として一年生。これからの航海には様々なことがあるだろう。楽しいことも、嬉しいことも、時には悲しいことやつらいことも。船が大きく揺れてしまったり、嵐に出会ったりすることだってあるかもしれない。それでも何とか、みんなで船をこいでいこう。先ほどの挨拶で高く掲げてしまった目的地、「自由の港」までたどり着けるように。きっと大丈夫。この船には、保護者の皆さんや先生たちをはじめ、応援してくれる人たちがたくさん、ついているから。

付記：その後、私たちの船は新たな仲間を一人迎え、一年生は総勢16人になりました。それぞれの個性がだんだん見え始めています。これからもどうか、あたたかく見守ってくださいますように！

とてもいい日でした。
心のこもったあたたかな入学式は、この学園の在り方そのもの。
桜もこの日のために散らずに待っていてくれた、そんなよく晴れた日でした。
息子のあまりにも堂々とした姿に驚き、彼の成長を家族全員で喜び、見届けました。
この船は出発しました。これからどんなドラマが待っているのでしょうか。
これから始まる9年がとても楽しみです。
学園の皆さま、これからもどうぞよろしくお願いいたします。(足立和弥・雅代)

心温まる素敵な時間でした。玄関での自分のマークとの出会い。入学式での担任の先生との出会い。初めて呼ばれる自分の名前。かわした握手。その瞬間はどれも特別で、これから始まる新しい毎日への期待と喜びに満ちていました。そのあとはライアーの演奏が贈られ、柔らかな音色はたくさんの喜びとともに心の奥深くへと響き、1つ1つの瞬間が心に刻まれていくようでした。これから子どもたちが歩いていく未来が楽しみです。(薄井優・裕香子)

春の光が眩い日の入学式でした。
式が始まり、名前を読み上げられて林先生と挨拶する子どもたちの姿、お花を持ち、目をキラキラ輝かせて前に立つ様子が忘れられません。
「出発してきます！」という林先生の力強い声に導かれ、同じ船に乗って出発した子どもたちのこれからが楽しみです。(カラバハルカルロス・太田杏奈)

上の二人は転入だったので三人目にして初めての入学式でした。
当日ご案内くださった先生方はもちろん、一年生を楽しみに待っていた子どもたち、また花籠を用意してくださった保護者や目に見えないところでたくさんの方が関わっていることすべてが温かく迎えてくださったことに感謝しています。
娘はおかげさまで毎日本当に元気で心から楽しんでいきます。
この環境をつくってくださっている皆さまに心から感謝いたします。(大塚耕輔・梨佳)

いよいよ入学式、朝から一成はこの日を迎えられた喜びで溢れていました。花籠を持って前に並んだ子どもたち、気持ちは前を向いていて、ああいよいよこれから始まるんだ！と実感しました。



入学式の帰り道、「先生が色々教えてくれて、学校って楽しいんだね。明日も行ける？」と張り切っていました。学園の皆様は暖かく迎えていただき、本当に入学できてよかったなど感じる日々です。どうぞよろしくお願いいたします。(梶本一樹・寛子)

まっすぐと何の躊躇いもなくごく自然に林先生の前へ一人で歩き出し、挨拶をした娘は、このあとさらに成長し、どんな小学生になっていくのでしょうか。

生き生きと輝く子どもたちの声でいっぱいの学園は、子どもの本来性を守り、娘らしさそのものを成長させることのできる場だと信じて、この日を迎えました。

先生方と保護者の皆様が一丸となつてつくる教育環境が、学園全体の温かい雰囲気となって、15人の新1年生に自然と笑顔を与えたのだと直感することのできた素晴らしい入学式でした。(菅野登志也・昌子)

「今日はシュタイナーの入学式だ！」と朝飛び起きた宙。期待と緊張で向かった入学式はとても温かで、林先生との初めての出会いと握手の時や、可愛い花かごをいただいた時の息子の悦びの表情が思い出されます。日々の生活の中でも「一年生だから！」と張り切っています。始まったばかりの大航海、私自身も学ばせていただきながら楽しみたいです！(熊崎弓恵)

待ちに待った学園。心から身体からドキドキとワクワクが溢れてきて、新入学のつどいの後には毎回発熱していた彼。入学して数日後、ぽつりと「はやく字がかけようになりたいなあ」学ぶことの喜びがじんわりと伝わってきた瞬間でした。かわいい赤ちゃんと思っていたのに、成長はあっという間で嬉しくも寂しくもあります。そんな親心をはねのけ、風のように走っていく彼を頼もしくも感じます。9年間どうぞよろしくお願いいたします。(児玉直之・咲季)

繋ぐ手は力強く緊張しながらも、楽しみ！と笑顔で向かった入学式。担任の先生の紹介には身を乗り出して確認し、ほっとした顔をしていて思わず笑ってしまいました。林先生と15人のクラスメイトで始まる9年間の航海。お互いを思いやり、助け合える仲間成長して欲しいと心から願っています。あたたかなこの場所で、たくさんの光に満ちた世界が広がりますように。学園の皆様、これからどうぞ宜しくお願い致します。(鈴木崇士・美沙子)

次男(8年生)の入学5日前に誕生した三男が、この春ついに1年生になりました。

学園の共同体で生まれた彼は、たくさんの腕に抱っこされ、顔をつんつん、頭をいい子いい子されながら赤ちゃん時代を過ごした幸せ者です。私自身もたくさんの手助けや声掛けに支えてもらいました。

さて新たな出発。この場を築いてくれた、過去からのたくさんの力に感謝しながら、林クラスの仲間たちの成長を楽しんでいく9年間にしていきたいです。(千代継・由美子)

この春、長女の入学から6年を経て、長男の入学を迎えました。共働きのためシュタイナー幼稚園ではなく保育園に子どもを通わせていた我が家は、長女入学時は全くの新しい環境に親子とも期待と不安が混ざるスタートでした。今回は学園にも慣れ、さあついに長男の9年間のスタートがきられた、と希望と嬉しさに満ちた入学式を迎えることができました。まだあどけなさの残る1年生たちの今後の成長がとても楽しみです。(永野辰馬・康子)



「怖いから行きたくない」…そう言って、卒園前から行き渋っていた息子。娘の登下校で様子を掴み、無事入学式を迎えることができました。

子どもたちへのうたや詩は、大人のわたしにも力強く響き、背中を押してもらったように思います。まだまだ夢の中のような小さな人が、一年生になるなんて。信じられないけれど、学年問わずニコニコでお友だちに話しかけ、自分の足

でしっかり歩いて帰る姿は、「喜び」と「信頼」で満ち溢れていて、とてもまぶしいです。今を大事に生きたいと思いません。(原口絢子)

幼稚園での水疱瘡流行、引っ越し、卒園式と慌ただしかった3月。

片付けもある程度落ち着いた頃、待ちに待った入学式でした。

緊張している子どもたちを優しく迎えてくださった林先生はじめ、学園の皆様のあたたかさに満ち溢れた空間がとても心地よく、仲間入りさせていただけたことを嬉しく思います。

これからの9年間、楽しみながらいろいろな経験を積み重ねていきたいです。

親子ともども、よろしくお願ひいたします。(三岳恵美)



クレヨンケースを手にして目を輝かせていた華奈。どんなお勉強するのか、先生は誰かな、私はどんな女の子になるのかなと、小さい体でたくさんの夢を膨らませていた春でした。兄も誇らしげに質問に答えていて、新しい風が吹いています。

どんな世界を見て、どんな花を咲かせるのか。私たちは見守っていくのが楽しみです。大航海へ出発！先生方、保護者の皆様、どうぞよろしくお願ひします。(山口祐二・秩香子)

入学式は迎え入れてくださるすべての方々の優しいあたたかな気持ちと華やかさの中に心落ち着く空間の学舎、そしてライアーの美しい音色に今、ここにいる喜びを感じる美しい時間でした。

娘は毎日楽しく通っています。朝すれ違う保護者の方々の優しい眼差しとご挨拶、玄関とお教室でよく来たねと迎え入れてくださる横山先生と林先生、玄関に飾られた可愛いお花たちと上級生の元気な姿に毎日心が温まります。これから親子共々この学舎でたくさんの経験と思い出を積み重ねることができると感謝をし、大切に過ごしていきたいと思いません。(横山幸二・めぐみ)

私が中学生や高校生だった頃に経験した修学旅行は、いずれも京都に行ったのですが、京都市内を大型バスを連ねて移動しては目的地で降り、ガイドさんに連れられてぞろぞろ歩き、どこに行ったのか何を見たのかをほとんど覚えていません。歴史の授業は年号と出来事の暗記が試験のために重要で、私にとっては興味もわかず好きな教科ではありませんでした。

しかし、歴史は人間が時間と共に築いてきた「人が織りなす物語」です。面白くないわけがないのです。そのことをシュタイナー学校の担任になって、子どもたちに歴史を教えるようになって初めて実感しました。歴史は先人たちの残した物語を追体験しながらハラハラ、ドキドキ、ワクワク、ゾクゾクする教科だったのです。

そして私たちは歴史の学びで心を動かした後に、実際にそれが起こった現地に足を運んで今も残る遺跡を見たり、街を歩いたりして当時に思いをはせるという歴史旅行や歴史遠足を行います。本物の「修学」旅行です。

6年生では奈良時代を学び奈良旅行に行きました。7年生では平安時代後期から鎌倉時代、室町時代を学びました。そこで横浜から日帰りで行かれる鎌倉の街へ歴史遠足に行ってきました。

校外活動には下見は必須です。春休み中の下見では昨年鎌倉遠足に行った9年生担任の伊藤先生にガイドをお願いして、今も当時と近い状態で残っているという名越（なごえ）の切通しを先ずは案内してもらいました。時間も本番と同じ早い時間の電車が出発しました。

鎌倉は天然の要塞と言われる三方を山に囲まれた街です。一方は海なので船でしか攻め込むことができず時間もかかります。しかし、食料や日用品などの運び入れや運び出しには山側にも道が必要です。そこで考え出されたのが、馬一頭が通れる幅の切通しを山側の岩を垂直に切り削って作るというものです。大群で攻めてきた敵も馬一頭ずつしか通れないのですから十分な力を出せず、まごまごしている間に崖の上で待ち構えている鎌倉勢に矢を射かけられてやられてしまうのです。



名越から山を越えて歩きながら街に出て、そこから名所を見学していたらいつの間にか鎌倉の中央通り、若宮通りに出たので予期せぬ近道のように嬉しくなりました。そのまま鶴岡八幡宮、源氏の守り神の白幡神社、頼朝の墓をまわってその日の下見は終わりました。

しかし、それで生徒を連れて問題なく鎌倉を回れるかと自問するとどこかに一抹の不安がありました。そこで本番二日前の日曜日、お天気は雨でしたがもう一度独りで下見に行こうと決意し午後から出発しました。

鎌倉駅から10分程バスに乗り、緑ヶ丘入口という所で降りて名越の切通しに入るのですが、なんと入り口である階段が見つけられず最初から道に迷ってしまいました！電話で伊藤先生に助けを求めながら入り口を見つけ、「やっぱりもう一度来てよかった。最初から道に迷っては生徒に対して面目が立たなかった。」と思いました。しかしその後も何度か伊藤先生に電話しては道を確認する有り様で、情けない限りでした。

今回は新田義貞が刀を竜神に捧げて潮が引くという奇跡を起こした「稲村ヶ崎」に行きたかったので江ノ電で行ってみました。潮が引いた稲村ヶ崎から一気に新田軍が攻め込んだため、不意を突かれた鎌倉軍は敗退し、鎌倉を治めていた北条一族は氏寺で子どもも一緒に自害しました。鎌倉幕府の滅亡です。強風の中で荒れ狂う海を見ながら「奇跡は本当に起こったのかもしれない。」と感じました。

遠足本番の4月15日（火）。前日からの雨が少し残っている朝でしたが、十日市場駅で電車を待っている間に空はどんどん明るくなり、気候も良く、絶好の遠足日和になりました。長津田から乗ってくるのが3人、十日市場からは私を含めて4人、鴨居から1人、大船で1人と無事生徒8人と落ち合うことができました。

今回の遠足の行程を書いておきます。鎌倉駅—名越の切通し（途中にまんだらやぐら堂）—安国論寺—日蓮上人説法跡一段かづらを上って鶴岡八幡宮—白幡神社—源頼朝の墓一段かづらを下って鎌倉駅—江ノ電で稲村ヶ崎（昼食）—江ノ電で鎌倉駅—横須賀線と横浜線を使って帰路。

最初の名越の切通しでは、「本当に馬が1頭しか通れないね。」という声を聞きながら、岩がごつごつしている切通しを歩き、時には鎌倉軍になったつもりで崖の上から敵を待ち伏せする気分を味わう子たちもいました。雨上がりなので道は多少ぬかるんでいましたが、私が歩けるのですから生徒たちには軽々です。切通しの途中には「まんだらやぐら堂」という岩を四角く掘った穴に石の仏様が祀ってある場所があります。鎌倉は平地が少なく死者を埋葬する墓地を作る土地がなかったため、このように岩を掘って死者を葬った「やぐら」というお墓が多いのです。

30分ほどで街に出ると日蓮上人の庵があったという安国論寺に寄りました。日蓮宗を信仰することを強硬に勧め、他の宗教を批判した日蓮上人は命を狙われたりもしました。暴徒から身を護るために庵から逃げたという記録もあるようです。それでも説法を辞めず道端で熱く語ったという日蓮上人の辻説法跡に回るときに、私は間違ったところで角を曲がってしまいました。

閑静な住宅街を歩けど歩けど「あれ？」と言う感じの街並み。ついに覚悟を決めて振り向き、「みんな、どうやら道を間違えたようです。」と伝えると「ええ！ずいぶん歩いてきましたよお！」と言う落胆の声。「そうだね。ごめん。戻ろう。」と道に戻りました。すると黒いベンツが家から出てきたのを見かけたので、手を振りながら車に近づき、運転しているご婦人に道を尋ねました。彼女の指示で山を越えるトンネルを抜けて向こう側に行くことになりました。ちょっと不気味で人気のないトンネルだったので生徒たちは妙にはしゃいでいました。



その後は無事に日蓮上人辻説法跡に着き、そこから若宮通りに出て、段かずらを歩いて鶴岡八幡宮に向かいました。段かずらの入り口は広いのですが八幡宮に近づくにつれて狭くなり、遠近法によって道のりが長く見えるように工夫されています。段かずらの幅を実際に歩いて歩幅で測っていた子もいました。本当にすごく幅が違うので改めて驚きました。

頼朝の死後、息子の実朝は石段を下りている時に大銀杏の陰から飛び出してきた甥の公暁（くぎょう）に襲われて殺されました。公暁もそこで切られて死に、源氏の直系の血は絶えます。その時の大銀杏は樹齢1000年、幹の周りが数メートルもある大樹ですが、2010年の強風で倒れ、今はその根から新しく生えてきた若木が伸びています。その急な石段を上り境内に入った生徒たちは、神社でのお参りの仕方に従って、二礼・二拍手・一礼でお参りしました。何を祈ったのでしょうか？ちなみに私の祈りはどこでも変わらず、いつでも「世界平和」です。これ以上の望みはありません。



そこからは段かずらを歩いて駅まで行き、江ノ電で稲村ヶ崎へ行く予定でした。ゆっくり座ってお弁当を食べている時間がないかもしれないので、歩きながらでも食べられるおにぎりやパンを昼食用に用意してくるようになっていたので、ある男子は段かずらを歩きながら袋に入ったパンを食べていました。すると突然、バサッという音とともに、何かが彼と隣を歩いていた友だちの間を飛び過ぎていきました。何が起こったのかわかるのに数秒間。彼の手にはパンを包んでいたビニール袋だけが残っていて、パンは姿を消していました。トンビです！二人とも「トンビの羽が顔に触った！」と言うので、「怪我は？」と聞くと「大丈夫」とのことで安心しました。鎌倉はトンビ要注意の町ですが、まさか桜並木の枝がかぶさるように並んでいる段かずらにまでトンビが舞い降りてくるとは思っていませんでした。その正確な捕獲能力に脱帽です！

その後行った稲村ヶ崎は強風で波が荒れ、いくつもの波頭が海面を覆っていました。そこは岩場でしたが、生徒たちは「砂浜に行きたい！」という希望だったので海沿いの道を歩いて七里ヶ浜に行きました。上空ではトンビの群れが悠々と舞っていて、私たちは彼らに狙われないように慎重におにぎりを食べました。晴れてはいましたが本当に風が強く、砂が顔に当たると痛いので帽子や上着で砂が当たるのを防ぎました。そんな荒れた海にズボンをまくって入っていく4人の男子。その無邪気さに笑いました。こういう時にはしゃぐのは大概男子です。彼らが十分に遊んだ頃、「帰るよ～、靴を履きなあ～」と声をかけ、七里ヶ浜から電車に乗って帰路につきました。

観光地として外国からのお客さんもたくさん訪れる鎌倉ですが、歴史の上では結構悲惨な出来事が起こっている場所です。そういう事実も心にとめながら街を歩くと、見える風景も少し違います。そしてどんな場所にもそこにいた人々の物語があり、歴史があるのだと思うとどんな場所も大切な場所になります。観光地に行く際にはぜひその場所にまつわる歴史を少し学んでから行くことをお勧めします。



4月17日木曜日に台湾の雅典娜華徳福学校（アテネシュタイナー学校）の生徒、教職員計27名が横浜シュタイナー学園に来訪しました。

台湾の雅典娜華徳福学校は1年生から12年生まで、22名の生徒が在籍しています。教員は4名で、事務職員1名の小規模なシュタイナー学校です。ほぼ台湾の真ん中に位置している彰化県にあります。元々、横浜シュタイナー学園に通っていた生徒がお父様の台湾勤務によって現在お世話になっているご縁で、この度、横浜シュタイナー学園に訪問する運びとなりました。

当日9時くらいに一行は十日市場校舎にやってきました。9年生はすでにオイリュトミー室で待機していました。9年生から準備ができたという合図をもらい、台湾の生徒たちをオイリュトミー室に案内しました。9年生の拍手に迎えられて、台湾の生徒たちは恥ずかしそうに入場しました。そこに8年生も加わりました。9年生の皆さんは音楽専科の伏見あかね先生のご指導のもとで、短い期間で「さくらさくら」の合奏を準備し、台湾の生徒たちへの歓迎のプレゼントをしました。美しい音色がオイリュトミー室に広がり、台湾の生徒たちもきっとこの温かい贈り物に緊張がほぐれたことでしょう。その後、台湾の生徒たちは9年生、8年生たちにシューベルト作曲の「野ばら」という歌を中国語で歌ってくれました。

温かい空気に包まれ、子どもたちが円になったところで、9年生担任の伊藤雅子先生は円の中心に小さい台を置き、ロウソクを灯しました。両校の生徒たちはそれぞれ日本語と中国語で朝の詩を唱えました。1年生から中国語を学んできた8年生と9年生にとって、なじみのある言葉、フレーズが聞こえてきたことにうれしく感じたのではないのでしょうか。

8年生、9年生は低学年の時から、中国の唐詩を唱えてきました。せっかくなので、ぜひ母国語が中国語の台湾の生徒

たちと一緒に唱えられたらと、私は思っていました。このような経験を通して、母国語が違っていても、言語の習得によって、言葉の壁を越えて、同じ文化を共有できることを、ぜひ生徒の皆さんに身を持って体験してほしいからです。なので、事前に台湾の先生に三首の唐詩と一緒に唱えるようお願いしました。当日、唐詩の美しい響きが十日市場校舎のオイリュトミー室に広がった時、私は大きな感動を覚えました。学園の生徒たちも、自分たちが学んできたことは実際に母国語が中国語としている台湾の生徒に通用することに驚きました。「私たちが学んだ詩は中国で大変有名だね」、「きっと日本の『さくらさくら』みたい、よく知られている詩だね」と9年生の生徒からこのような話を聞きました。

生徒たちの緊張感をほぐすために、台湾の先生によるゲームもありました。元横浜シュタイナー学園の生徒の保倉俊太郎が8、9年生にゲームのルールを日本語で説明してくれました。3つのリズムにそれぞれの決まりと方向があり、隣の人が叫んだリズムを聞いて、自分の動きを判断するゲームです。みんなでこのゲームによって、テンションが上がり、言葉の違いも忘れて、純粋にゲームを楽しみました。お互いに少し慣れてきて、両校の生徒たちを8つのグループに分けて、小さい輪の中で交流を深めるようにしました。その場の共通言語は中国語と英語でしたので、両校の生徒たちはまず頑張って中国語でコミュニケーションをはかり、うまく伝わらない時は英語を使ってみたり、工夫して、有意義な時間を過ごしました。



午前の第一専科から、6、7年生も輪に加わりました。横浜シュタイナー学園の4学年の生徒たちは「さくらさくら」を歌いました。その後、全員で二重の輪になりました。英語、中国語、日本語でアイスブレイクゲームをしました。両校の生徒たちは手をつないで和気あいあい、ゲームを楽しみました。せっかくの機会なので、すべての生徒たちに中国語で名前と家族構成の紹介をしてもらいました。横浜シュタイナー

学園の生徒たちは恥ずかしがらず、しっかりと中国語で紹介できました。特に家族構成の部分で、生徒たちはすぐ反応し、「へえ、6人家族ですか」、「一人っ子さんですね」、「なるほど、兄弟ですか」といろいろとコメントしていました。その後台湾の先生の数字ゲームで、みんなでたくさん笑い、楽しい時間があっという間に過ぎました。6、7年生は授業に戻りました。



第二専科の時間になり、8、9年生と台湾の生徒たちはまた輪になり、最後のプログラムに入りました。台湾の学校の今回の訪問は中国語を練習するよい機会と捉えて、9年生はそれぞれ中国語で質問を考えました。いよいよ質問タイムです。自分たちの中国語は果たして通じるか、9年生のみんなは気になりながらも、立って、しっかりとした発音で考えた質問を試してみました。なんと、台湾の生徒たちは全員の発音を聞き取ることができました。みんなは本当に嬉しそうでした。また台湾の生徒たちによる答えも理解できて、横でその光景を見ていた教師の私が感無量でした。

お別れの時がやってきました。両校の生徒たちは中国の歌「ジャスミンの花」を中国語で歌いました。台湾の生徒による手作りのプレゼントの贈呈もありました。台湾の代表的な風景、ロゴが描かれた木製のプレートが十日市場校舎の床に並べられた時、8、9年生のみんなもわあ〜と驚きの声をあげました。低学年の生徒による手作りのプレスレットも素敵でした。

別れ惜しく、両校の生徒たちはお別れしました。その後、事務局長の佐藤さんは新治里山交流センターまで案内してくれました。暑い中で到着が予定時刻より遅れましたが、涼しい日本の古民家に入って、台湾の生徒たちは一息ついて、お弁当を食べました。その際、台湾の先生たちは横浜シュタイナー学園の運営について、佐藤さんにいろいろと質問しました。特に生徒募集の面と保護者のシュタイナー教育への理解を深めることについて、強い関心を示しました。佐藤さんはその都度丁寧に説明しました。台湾の先生たちは何度も頷きました。

生徒たちの疲れが少し取れたところで、今度は佐藤さんが、木陰がいっぱいの散策路を案内してくれました。竹林を通った時、台湾の生徒たちはあまりにも感動していたので、思わず「台湾には竹林はないですか」と聞いてしまいました。日本では、どこにもありそうな風景ですが、海外から来る子どもたちにとって、こんなにも感動を覚えるのだとつくづく感じました。

霧が丘校舎に向かう途中、萱場公園で4年生の男子生徒に会い、私が中国語で彼らに「台湾からのお客さんですよ」と説明したら、子どもたちはすかさず「你好」とあいさつしました。赤みちでまた何人かの低学年の生徒に会いましたが、その都度子どもたちは堂々と、臆せず中国語であいさつしました。台湾の先生たちは横浜の子どもたちのオープンさにとっても感心しました。

予定より大幅に遅くなり、15時前に霧が丘校舎に辿り着きました。そこで手仕事の三品先生が丁寧におひさまの部屋、オイリュトミー室、各学年の教室を案内してくれました。台湾の先生、生徒たちは各教室の季節のテーブルや、壁の色、そして角のない空間をじっくり見て回りました。

午前9時から午後4時まで、横浜シュタイナー学園でいろいろな学年と交流を持った台湾の生徒たちは、疲れ気味ではありましたが、楽しそうに帰途につきました。

後日、授業の時、9年生の生徒に台湾の子どもたちとの交流会の感想を聞いてみましたが、やはり自分たちが学んでいる中国語は通用するのだという確信を得ることができ、自信につながったと話してくれました。今回、台湾の生徒たちとの交流から得た楽しさが、今後の学びへの意欲につながることを願いつつ、日々の授業に注力していきたいと思う今日この頃です。



「先生、まだですか？」演目決めから、台本を渡すまで、どれくらいこの言葉を聞いたことだろう。「毎年8年生で行われるこの取り組みがかけがえのない体験となり、たくさんの滋養をもたらすように、また、その構築のプロセスが彼ら自身を力づけ、さらに将来にわたって生きる力となるように。」そう思えば思うほど、私にとっては大きなプレッシャーでもあった8年生劇。しかし、子どもたちは、この機会を待ち望み、とても意欲的で常に前のめり。思春期の子どもたちがこれほどまでに夢中に取り組むことに驚き、背中を押される日々であった。

劇づくりの際、最初に話したことは「話し合いの場では、ポジティブな言葉を使おう。特に反対意見の時は、違う意見を尊重したうえで、クラス全体にとってどうしたらより良いものになるのか、提案していくように進められたらいいと思う。」ということ。思いの相違によるぶつかり合いや思い通りにいかない葛藤など、味わうべきものをこの機会にしっかりと味わいつつ、子どもたち自身が乗り越えることで大きな力にしてほしいと思った。

演目において、残った候補はふたつ。シェイクスピアの『お気に召すまま』とミヒャエル・エンデの『ジム・ボタン』だ。『ジム・ボタン』に全員一致で決まるのにそう時間はかからなかった。最初の約束通り、話し合いはポジティブな言葉で満ちており、大変そうな課題もむしろそれを楽しんでいこうという雰囲気包まれていった。『お気に召すまま』を最後まで諦

めきれなかった子のために劇中劇というかたちで、入れ込むということも決まった。

ファンタジーの世界をどのように作り上げるのか課題はたくさんあったが、抱いたイメージを実現化してゆく工程を楽しむ様子は喜びに満ちていて微笑ましいものだった。機関車のエマは大勢が乗ってもつぶれないように、そして自由自在に動けるように工夫された。マンダラ国の透明の木や、竜の町の火山、背景幕の砂漠や海賊船など、驚くようなスピードで仕上がっていく。一風変わった登場人物のために、衣装係はせっせと手を動かし、習いたての足踏みミシンを踏んだ。小道具係はあれこれ想像しながら大量の小物を仕上げた。広報チームは、着々ときめ細やかに作業を進め、見ごたえのあるチラシやパンフレットを完成させた。教室は見る間に物で溢れかえったが、毎日、彼らの一生懸命さを目の当たりにし、出来上がる製作品の完成度の高さに感心した。

一方で脚本づくりは思った以上に大変な作業であった。2冊に渡る大作は読めば読むほど珠玉の言葉で満ちていて、削ることができない。子どもたちの好きな場面を繋ごうと意見を聞くと、彼らの心に残る場面は多岐にわたっていて、結局つくり上げた台本は200ページにも及び、このままでは一日がかりの上演となってしまう。終わりがないように思える台本に向き合う時間の中で、エンデのエッセイなどにも目を通し、ある文章と出会う。エンデは処女作であるこの物語についてこう語っている。「『ジム・ボタン』の2冊は何の計



いよいよ始まりのとき



”心をひとつに”



「みんなに届け、ぼくらの思い」

画もなく書き始めた。最初の行を書いた時、次の行をどう書くか知らなかった。あの物語は書きながら生まれたんだ。」と。そうであるならば、エンデが受け取ったインスピレーションを私の主観で曲げてしまわぬように、私もその源とつながるしかない。私は瞑想と迷走を繰り返しながら、毎日毎日原稿に向かった。

この楽しい物語をたくさんの笑いととも届け、その中にあるたくさんのキーワードをしっかりと保持することに注力

した。言葉や行い、数字に潜む深い意味を汲み取りながら、同時に一人ひとりの存在が輝くよう、セリフを足したり引いたりした。何度も反復して口にするものだから、その度に栄養となる言葉を選びたいと思った。そして、約5か月かかってようやく子どもたちの待ち望んだ台本の完成版を手渡すことができた。

子どもたちの配役は、揉めることなくスムーズに決まった。そこで得る葛藤もまたよい経験となると考えてはいたもの

の、みんなの納得のもとにすべての配役が決まった時には大きな安堵感に包まれた。19名みんなを主役にしたという思いは、練習中から彼ら自身がお互いに拍手を送ったり、褒め合ったりする中で、実現していった。たくさんの役を19人で担いながら、「ここなら自分が出られる」「この場面は、どう頑張っても全員無理だ」といった具合に、脚本に手を加えながら、みんなの力でまとまっていた。「誰一人として欠けることはできない。」そうみんなが感じていたことだろう。

この「児童文学」とされる楽しい物語は、シュタイナーの人智学にも通ずる内容であった。1冊目が2冊目の伏線と

なっていて、省いていい場面はほとんどないと言ってよかった。小さな国に間違えて届けられた箱の中に黒い肌の赤んぼうが届いたところからこのお話は始まる。ジムと名付けられたこの少年は善に満ちた小さなフクラム国から出ていくこととなり、様々な出会いを繰り返しながら、世の中の現実と向き合っていく。途中で出会う苦難や怖れ、様々な登場人物との関わりの中で知ってゆく差別や偏見、先入観。弱いものいじめ、妬みやそねみや私利私欲、独裁主義や劣等感など、ネガティブな要素も満載だ。「これからは人でもモノでも近くによってよく見もしないで怖がることは絶対にするものか。」と心に決め、前に進むジムの「お姫様を救い出す」行為は「自



フクラム国に届いた小包みには…



機関車エマでマンダラ国へ



劇中劇『お気に召すまま』



マンダラ国の道化師たち



マンダラ国にてピンポンのおもてなし



ボンズたちとの出会い

分自身の出生の秘密を明らかにする」ことでもあった。その中でも大きなテーマはやはり悪の存在であろう。悪の象徴である竜が殺されるのではなく手なずけられることで善きものへと変容する様が、見事に描写されている。子どもたちを捕らえて自由を奪っていた竜はつかまった後に一年間の眠りを経て《叡智の黄金竜》へと変容を遂げる。なんでも答えを知っている黄金竜はあえて言う。「けれどもあなたたちが自分のさだめに従って自分で探求すべきことに、もし私が答えてしまったら、私は《叡智の黄金竜》ではなく、ただのおしゃべりの粘土竜になってしまいます。あなたはいつの日か自分の力と賢さによってそれを明らかになさいます。」と。クラスのみんな、いや、私を含めた全員が一人ひとりジム・ボタンなのだと思うされたシーンである。この世に生を受けた一

人ひとりが、自分の運命に従って行くべきとことに向かっている。それは他でもない、自分自身の探求の道なのだと。そして、そのためには仲間が必要で、思いもかけない相手が実は欠かせない協力者のひとりなのだ。私が25年前、まだ幼い我が子たちを連れてアメリカに留学した際、「何か問題が起きた時、自分に合わない事柄や、人物に遭遇した時、それはまさにたどり着くところに行くために大事なカギとなる。必要のない出来事などないのだ。毎日、眠りの世界（精神界）では、日中の振り返りをして答え合わせをしているのだ。」と聞いた。繰り返し思い出され、励まされてきた言葉である。日常生活では思い通りにいかないことはたくさんある。劇の上演までの間にも、それぞれの中に悩みはいろいろあったことだろう。他者との意見の食い違いや思うようにいかない

自分自身の課題、発声や演技の葛藤など、きっと楽しいだけではなかったと思う。だからこそ得られたものがきっとあったに違いない。

また、子どもたちが絶対に削りたくないと言い、やりたい役として多くの手が挙がったのは、悪の手下ともいえる海賊の《荒くれ13》だ。見た目も何もかもそっくりな彼らは互いに認識することもせず、それを気にもしなかった。自分を犠牲にするという経験を経て善なる存在に変容し、一人ひとりが名前を得た時、自我が目覚めて今度は守り手となる。私の好きなやり取りがある。「俺たち12人とおかしらで13人にならねえかい?」「いいえ、おかしらはいつもあなたたちのうちの一人だったのよ。」というものだ。みんなが自分自身の中におかしらを担いつつ、他者の中にも存在するおかしらを認識する。クラスの中で長い月日を共にしてきた彼らともリンクし、嬉しくなっておかしらの目印である赤い星を全員分用意した。

この物語の全体を通して、人間の持つ弱さやネガティブな要素が、実は大きな秩序の中で大切な歯車のひとつであることが描かれている。コンプレックスを抱える半竜のネーポムク、他の人とは見られ方が異なるためにいつも一人ぼっちのトゥートゥーさん、相対する存在との和解を求めてさすらうウシャウリシュウム、、、彼らの存在失くしては環が繋がることはなかった。未来をつくっていく世界中の子どもたちがみんなそれを解ってくれたら、きっと戦争はなくなるのではないかと思う。

子どもたちはたくさんのセリフを覚え、ほとんどの子が2役、3役をこなしながら、実にイキイキとそれらを演じた。挿入曲は、音楽の時間に作曲したものが使われ、場面ごとの雰囲気の色を添えて盛り上げてくれた。役の合間をぬって奏でられる演奏にも驚かされた。たくさんの場面切り替えや効果音、衣装の早着替えなど、やることはたくさんだったが、



トゥートゥーさんとの出会い



ミセス・イッポンバと子どもたち（学校）



お家へ帰れる子どもたち



ライアーを奏でる（ズアズラピッチ姫）



磁鉄岩の連結器をつなげ明かりをとりもどそう



ジム、ルーカス、トゥートゥーさん、ネーポムク、人魚とウシャウリシュウムにご対面

熱心に取り組み、互いに補いながらしっかりと構築してゆく様子に感心した。

上演10日前、冬休み明けの通し稽古の前日、ジム役の子が左足首を骨折した。手術をして、上演に間に合うかどうかの大怪我だ。一瞬言葉を失いつつ、不謹慎だが「おお、来たか！これにはどんな意味が?」という武者震いのような感覚を得た。翌日、久しぶりに顔を合わせた子どもたちがその知らせを受け取り、つかの間の静けさの後に生まれたのは、みんな

の「大丈夫。やってみせる。」という強い思いだった。私たちはそれまでの「自分たちも楽しみながら、お客さんを楽しませ、一丸となってやり切る!」というモットーに加え、「ピンチはチャンス!」「諦めたらそこで試合終了だ。」を合言葉とし、ジムの動きや取り巻く者たちのセリフを変更した。台本の書き換え作業は笑いとともに行われた。機関車を頑丈に作った理由も最初から計画されていたかのようなようだった。もはや、私たちの中には何の不安もなかった（なんと入院中の本



海賊《荒くれ13》とジム、ルーカス、リーシー、 《荒くれ13》、《叡智の黄金竜》と会う
ピンポン

めざすは、まだ見ぬぼくらの国



響かせよう、心ふるわせるメロディー

お客さん、そして関わってくださったすべての方に心より感謝

人にも!)。「先生、ここの動きどうしたらいいですか。」「こんな風にやってみていいですか。」と各自の演技にも身が入る。本番を目の前にジム不在のまま、一人ひとりが全体の調和をイメージしながら練習に取り組み、いよいよ本番の前日、ようやく19人が揃って、みんなの顔に満面の笑みが広がった。最後となる通し稽古は互いの協力と思いやりに溢れていた。臨機応変さも加わり、より笑いをもたらすものになっていた。彼らの柔軟さに感嘆し、その絆がこの劇の本質とも重なった。

そして、いよいよ迎えた本番。幕開け前の緊張の面持ちがお客さんの反応や笑いによって、ほぐれてゆく。最後には大喝采と拍手に包まれ、文字通り眩しい姿があった。2日間の大舞台を終え、お客さんがいてくれて劇は完成するということを、身をもって知った彼らは、「楽しかった!」と満足そうな表情を浮かべ、さらに「最高の体験だった。見守り支えてくれた家族や先生方、照明で舞台づくりに力添えしてくれた二村さん、関わってくれたすべての方、そして、この劇を完成させてくれたお客さんたちに、感謝。」という言葉が溢れさせた。

終了後たくさんの方から、「全員が主役のようだった。一人ひとりの役がぴったりでみんなが輝いていた。」との言葉

をいただいた。実際に誰もが欠かすことのできない存在で、みんながいたから出来たということを実感していた彼らにはとても嬉しく響いたに違いない。

この先、子どもたちの人生は、決して平坦な道ばかりではないだろう。壁が立ちはだかるように感じたり、逃げだしたくなることもあるだろう。そんなときに思い出してほしいと思う。「相反するものが力を合わせれば奇跡が起こる」ことを。悪やネガティブな要素は、排除すべきものではなく、相応しい場所に置かれることでむしろ善へ向かうギフトのような存在にもなりえることを。そして、そこで得る「変容」をかけたえのない宝として携え、まさに「ピンチをチャンス」にして、豊かな人生を築いてほしい。

8年生劇は、子どもたちにとっても、私にとっても、大きな宝物を残してくれた。《荒くれ13》が《無敵の12》になったように、《まだ粗削り13期生》は、この先《無敵の20(担任含む)》となって、世に出ていく。そして、変容しつつ、いつの日か自分の力と賢さによって、生まれてきた理由を明らかにして、成すべきことをやり遂げることだろう。

この夏、ジムの左足首からボルトが外される。骨のみならず、みんなの絆も一層強く繋ぎとめてくれたボルト君に別れを告げ、19人も将来に向けて動き出す。

インフォメーション

詳細やお申込方法については学園サイトをご覧ください

2026年度 新・転入生 入学説明会

【A】「シュタイナー教育とは」「教育内容について」

【B】「保護者の学園への関わりについて」

* A→Bの順で両方の回に必ずご出席ください。

6/14(土) 入学説明会 A (14:00～16:00)

6/21(土) 入学説明会 B (10:00～12:30)

9/6(土) 入学説明会 A (14:00～16:00)

9/14(日) 入学説明会 B (10:00～12:30)

9/14(日) 入学説明会 A (14:00～16:00)

9/20(土) 入学説明会 B (10:00～12:30)

詳細は学園サイトにてお知らせします。

.....
シュタイナー学校を知りたい!②③

②大人のための体験授業 低学年編「お話・水彩」

日時：7月6日(日) 10:00～12:10

会場：霧が丘校舎

③大人のための体験授業 高学年編「世界史・劇」

日時：7月6日(日) 13:45～15:55

会場：十日市場校舎

参加費：第2・3回目 / 各回 3,000円(一般)・2,800円(NPO会員)

1日 5,000円(一般)・4,800円(NPO会員)

※NPO会員・賛助会員の方は年間パスポート(4,000円)を購入されるとお得です。

※第2回目のみ保育(有料)の用意があります。お子さまと一緒にの参加はできません。

詳細・お申し込みは学園サイトをご確認ください。

.....
多面的シュタイナー考察 建築講座 1

「生きるための衣食住」

建築講座1「物質的側面から」

講師 岩橋 亜希菜

日程

建築講座1：2025年6月15日(日) 10:00～12:00

詳細・お申し込みは学園サイトをご確認ください。

.....
大人のオイリュトミー

講師：市川 聡子(オイリュトミー専科教員)

1学期 6/16、7/7

2学期 9/8、10/6、11/10

3学期 1/19、2/9

(いずれも月曜日)

時間：9:15～10:45

会場：霧が丘校舎 オイリュトミー室

参加費：1回 1,500円

*NPO会員パスポートをお持ちの方は適用されます。

*参加費は当日お支払い下さい。

.....
校内見学会

学園の雰囲気を肌で感じていただける機会として、校内見学会を実施しております。

教室など校舎内を教員・事務員がご案内します。

日時：7月11日(金) 15:30～1時間半ほど

会場：霧が丘校舎

参加無料(要予約)

お子様連れ可です。

オープンデイ&学園祭

日頃行っている授業や教室の様子などを公開する

オープンデイを霧が丘校舎にて開催します。

十日市場校舎では、7・8・9年生の学園祭を同時開催します。

こちらもご参加いただけます。

日時 2025年6月7日(土) 10:00～14:30

参加方法 事前受付制

詳細・お申し込みは学園サイトをご確認ください。

.....
～事務局より～

ご寄付ありがとうございます。

(順不同・敬称略)

山本忍、保倉裕、岡林睦、大西敬子、金田治子、室恵子、

森山由美子、林ヒロ子、星の金貨

学園にお気持ちを寄せてくださり、心より感謝申し上げます。

☆星の金貨より☆

校内見学会・公開講座・オープンデイなどの際には、どうぞお店にお立ち寄りください。

書籍・ポストカード・シルクやコットンの染め布・

フェルトのお人形・編みぐるみ・木工品・

蜜蝋ロウソク・蜜蝋粘土など揃えております。

子どもたちが使用しているクレヨン・色鉛筆・

エポックノートもございます。

お問い合わせ☆星の金貨

kinka.hoshino7@gmail.com

.....
お問合せ、お申込み先

横浜シュタイナー学園事務局

Tel: 045-922-3107

https://yokohama-steiner.jp/



『学校づくりをご支援ください』詳細は、
https://yokohama-steiner.jp/unei/gakko_dukuri/

.....
【NPO会費・ご寄付等お振込先】

郵便振替：00260-0-130702

加入者名：特定非営利活動法人横浜シュタイナー学園

ゆうちょ銀行：店番 029 支店名 029 店

(セブン銀行) 当座 0130702



横浜シュタイナー学園～Newsletter 第169号～

2025年5月28日発行

編集：広報の会

発行：NPO法人横浜シュタイナー学園

https://yokohama-steiner.jp/

〒226-0016 横浜市緑区霧が丘3丁目1-20

TEL 045-922-3107

※掲載内容の無断転載をお断りします